

ルルネッサンスに思う

海野 和三郎 (名誉教授)

ルルネッサンスという言葉があるかどうか知らない。しかし、ルネッサンスに勝るとも劣らぬ文化の大変革が目下確実に進行しつつあることを考えずにはいられない。その大変革をもたらす原動力となっているものに、他にもあろうが、少くも宇宙と生命と情報の3つの理学がある。それゆえ、大学における学問の根をうるおす水脈を枯渇させかねない今のような無明の文教政策では、人類の将来にとってまことに心配であるといわざるを得ない。事は重大である。しかし、激しい潮流に乗っている人でも、目前のことばかり見ていると潮流の速さに気付かない。何とかして皆に今の非常事態をわかってもらう方法はないものだろうか。

貿易摩擦が大きな問題になっている。しかし、これは後から来るルルネッサンスの前ぶれにすぎず、これ単独ではロボットによる産業革命が新しい安定状態へ到達する単なる過程にすぎない。第2次世界大戦の生んだ原子爆も世界をひっくりかえしはしなかった。中国の文革もやがておさまってしまった。単独の原因或は2つまでの変動要因では、高タリミットサイクリ的な振動をおこすにすぎないのである。ところが、今度やってくる大変革は、それとはちょっとわけがちがうようである。生命と情報の科学には、いわゆるハイテクが伴ない、これらが世の中を変える要因となっていることは比較的わかり易い。しかし、世界観、価値観を変えるものは、ルネッサンスにおけるコペルニクスの転回に見られるように、宇宙観の変革である。これまでの科学はくり返しのきく現象を扱ってきたが、素粒子と宇宙が同じ法則性から同時に誕生したとする新しい、しかも繰返しのきかない宇宙観が現代の宇宙観になってきているのである。産業革命、情報革命、それに宇宙観革命と3つが結合して作用すると、そこに驚天動地

の新文明が出現せざるを得ないのである。大学をいかにすべきかを考えるのに、貿易摩擦程度の背景で考えてはいけないのである。貿易摩擦も勿論大事である。しかし、それが大学にとって大事なものは、その後ろに産業革命があるからであり、その産業革命が大事なものは、その後ルルネッサンスがあるからである。大学が対処すべきは、ルルネッサンスであって、貿易摩擦ではないのである。

総合大学は肥大化し、活力を失っているという意見がある。総合大学は、各学部、学科、教官の自治でほとんど動いているから、この批判はあたらない。しかし、キャンパスが新しい発展を盛るには不十分であることと、でき上った総合大学にはあまり予算をつけないようにという水平化の風潮が広がっているために、目立つほどの発展は極めて難しいことは事実である。来年度開設予定の国立大学院でも、新潟、金沢、岡山など各地の大学、生命科学、システム科学、物質科学などを専攻の自然科学研究科を開設して、新時代に対処しようとしているが、こういった機敏さは大きな総合大学ではむづかしい。さらに、ここ数年、校費は実質的に目減りし、光熱水料などが校費の何割も占めるようになって、こんな小さな事が土台を食う白蟻の如く、各教室の活力を根底からゆるがすこととなってしまった。

一方、学問文化の発達はやがて価値観の根本的改訂を要求し、人間存在自体の意味が問われているルネッサンスにおいては、総合大学の果すべき役は以前に増して大きい。物質文明は勿論大事である。しかし、ロボットに職をとられて無気力に失業し、あるいは争そわなくてもよい相手を敵にしてこれに勝つことが目的となったり、自分より劣った者の存在を生きる支えにするような、そんな社会よりは原始の社会の方が遥かによい。

結論を急ごう。大学を活性化するにはどうすればよいか。第1に、大学教官は、各人の研究を行うと同時に、共同して宇宙地球科学、生命遺伝子科学、数理情報科学といった広い基盤で行う研究を興してこれに参加する。2. 大学はいくつかの対ルネッサンス機関研究をつくり、現在の教官あたり積算校費とは別枠で、教官全員に一人あたり200万円程度（少なすぎるか？）の研究費配分を行う。3. 各教官は、半分を校費的に（大学院生研究助成など）つかい、残る半分は学部間にまたがる上記プロジェクト研究に提供する。4. このプロジェクト研究は、学内は勿論、他大学、他

研究機関の研究者にも開放され、3年程度の研究成果を“売れる”単行本の形で印刷公表する。英文で大学出版会が出すとよい。

科研費は政府の補助金であって、そのため会計は単年で使用にも制約が多く、むだが出易い。ルネッサンス研究費は補助金でなく、国の世界文化に対する貢献の姿勢を示すものとして、できればいまの防衛費などのように高度の優先的配分を行ってもらいたい。額は知れている。しかし、それで人間の将来に明るい燈台の灯がともるのである。